寄り添う

外国由来の子どもたちと共に

知らない言葉の中で生きる

もしもの話。子ども時代にタイムスリップしたあなたは、親に連れられて知り合いが誰一人いない外国に移住することになりました。周りの人は全員、あなたの知らない言葉を話し、学校の先生は、知らない言葉でどんどん授業を進めていっています。想像してみてください。どんな気持ちになりますか。多くの人は、不安や恐怖を感じることでしょう。

グローバル化が急速に進む昨今、外国にルーツのある人が私達の身近に暮らしていることは珍しくなくなりました。松本市には、60カ国以上、約4000人の外国籍住民が暮らしており、その数は県内市町村で上田市に続いて2番目に多くなっています。ということは、子ども達の数も当然多く、その多くは市内の公立小中学校に通っています。

私達、松本市子ども日本語教育センターは、そんな不安を抱えながら学校生活を送っている〝日本語を母語としない外国由来の児童生徒〟のための日本語支援を10年前から行っています。昨年度は中国、フィリピン、ブラジルなど9カ国、50人を学校現場で支援しました。

子ども達の来日理由は、親の就労や結婚、留学など多岐にわたっていますが、一つ共通して言えることは「自分の意志による来日ではない」ことです。日本で教育を受けて大人になるためには、日本語学習が必須ですが、母国への思いを抱きながら学校生活、日本語学習は、未熟な子ども達にとってはそう簡単ではありません。

この連載では、そんな子ども達の姿と、彼らにどう寄り添い学びへとつなげるかなどを支援の現場からお伝えしていきます。

（松本市子ども日本語教育センター コーディネーター・栗林恭子）

◇

松本市子ども日本語教育センターは、NPO法人中信多文化共生ネットワーク（CTN）が市教育委員会から受託し、運営しています。事務局を置く田川小学校から市内の小中学校に日本語教育支援員を派遣し、外国由来の子供の日本語学習を支援します。本欄はセンターのコーディネーター2人が交互に担当します。